

知覚の指向状態説

—— Allport の知覚諸学説批判とその構造学説 (7) ——

筑波大学心理学系 金子隆芳

A review of F. H. Allport's criticism on the theory of directive states of perception

Takayoshi Kaneko (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305*)

The directive state theory of perception as discussed and criticized by F. H. Allport in his renowned *Theories of perception and the concepts of structure* (1955) is reviewed. Although the theory is actually the one propounded by Postman, Bruner, McGinnies *et al.* in the so-called *New Look Psychology* movement in early 1950's, it has up-to-date significance in the light of cognitive psychology of today. The concept of perceptual defense is severely criticized by Allport for its anthropomorphological dilemma. He pointed out social factors for the delay of recognition of critical words instead of the hypothetical agent of defense. He also stressed two meanings of value which were effective for dimensional change but neglected in the directive state theory, i. e., *end-value* and *means-value*, the one is motivational and the other cognitive. Allport is against the functional method of the intervening variable theory but emphasized the need for the denotive concept for perceptual aggregates.

Key words : Allport, F. H., critical review, perception theory, directive state, perceptual defense.

ここに指向状態説とは Allport (1955) のいう directive state theory をほぼ直訳したもので、個体における欲求や価値などの動的要因すなわち動因が、その欲求や価値にかかわる事物の知覚のディメンジョナルな側面つまり量的側面のエスティメイトに影響するという問題に関するものである。これはいわゆるニューロク心理学がかつて大いに騒ぎたてたもので、そのかぎり旧聞に属するが、本稿は Allport の知覚諸学説批判として、これまでゲンタルト説、要素主義、機能主義その他(文献参照)の知覚学説をとりあげてきたものの一環であり、ゲンタルト説はじめこれらのテーマが現代でもその問題性を失わないのと同じ意味で、指向状態説もそれらと同列にあるものとして今回これをとりあげるわけである。

実際、知覚における主体側の条件の規定性については、今日流行の認知心理学で情報のボトム・アップ型処理とかトップ・ダウン型処理とか声高にしていることでもある。知覚の指向状態説はこのトップ・ダウン型処理の一種をいっていることに他ならない。認知心理学ではそれが現代の思考形式で現れているのである。

* * * * *

知覚の構造固有性と行動動因性

知覚には感覚知覚系の本来の構造によって規定さ

れる構造固有性 structural and autochthonous の側面と、指向状態説のいうような行動動因性 behavioral and motivational の側面とがある。

構造固有性は、受容器、求心性神経路、感覚皮質領といった感覚・知覚系の生得的な比較的不変の構造的所与によるもので、感覚次元の刺激規定性と心理物理学、あるいはゲンタルト説の知覚体制はこの構造固有性にもとづいている。このような条件における理論を形式的 formal ということができる。他方、行動動因性は知覚機能が他の心理的機能の一部となってこれと相互作用する側面をいうもので、その心理的機能には欲求、緊張、価値、防衛、情動、過去経験などがふくまれる。それらが中心的な指向状態を形成する。このような理論を機能的 functional という。

知覚の形式理論は行動動因性要素を一定にコントロールし、構造固有性要素の純粹な顕現をさまたげないようにする。他方、指向状態的機能理論は行動動因性要素をむしろ変数とする。ゲンタルト説は知覚者を完全に直接的現在の場の力学のもとにおき、過去経験や期待、防衛や動機を原則としては考えない。すなわち形式的である。

生理学的に言えば知覚過程は受容器の興奮、求心系インパルス、皮質過程(図形性、恒常性、順応水準など)、事物認知(意味、連合)、皮質統合(判断、

思考)の一連の過程である。これに筋緊張や運動反応からの固有感覚フィードバックが加わる(知覚の運動的要素)。指向状態説では欲求、情動、気質、人格などの生理的対性を並行させる。その全体過程のどこかで知覚の定量的側面が決定され、どこかで行動動因性要素が介入しているわけである。それがどこかはわからない。しかしまさにその点の追求が生理学的タームにおける指向状態説の究極の目標である。

いわゆる慣れとか構えの知覚への効果、たとえばそれらが知覚選択を促進するといったようなことは、単に知覚にとって“prepare the way”であって、知覚の内容に影響するというものではない。指向状態説は欲求、価値、関心などが、知覚内容にいかなる効果を及ぼすかを問題とする。一方、知覚対象には意味がともなうけれども、そのような認知的内容への効果を問うものでもない。事は知覚自体の問題である。知覚そのものについて、これを“to catch it in the very act”することである。たとえばいくつかの実験において、タキストスコープ法による刺激の精細な時間制御がおこなわれたりするのはこのことを反映しているのである。

実験的に問題とする知覚事象は知覚系の構造固有性のもとにあって一般にきわめて veridical である。他方、行動動因的效果はこれをゆがめる方向、つまり nonveridical な方向にはたらくのであるが、この構造固有的な規定のもとではその効果はきわめて小さく、その検出は普通にはむづかしい。しかしこの問題は知覚を臨界条件におくことによって解決される。つまり刺激規定性を人為的に著しく低下させて行動動因性要因介入の余地を与えるのである。このようなことは正常の知覚に対する方法とはいえないが、日常生活でも刺激条件のきわめて悪いこともあり、あるいは情動要因のきわめて強い場合もあるから、知覚理論としてはそれもカバーしなくてはならないといえよう。

指向状態説のための実験的所見

このような理由で指向状態知覚実験は臨界条件でおこなわれる。臨界条件は(a)刺激パターンの破壊(視覚刺激をすりガラスを通して見るとか照度を落す)、(b)あいまい図形や反転図形の採用、(c)空間的・時間的制限(タキストスコープ使用)、(d)心理物理的方法としての作成法 production method の採用などによる。また行動動因性要因としては身体的欲求、賞罰、価値、心理的欲求、人格、情動などの変数が実験的対象となる。つきにその実験的所見を述べよう。

(1) 身体的欲求の効果 Levine, Chein and Mur-

phy (1942) は空腹の被験者にすりガラスを通して食物その他の絵を見せ、連想語を言わしめたが、食物連想は空腹時間(3~6時間)に比例して多かった。ただし空腹が9時間に及ぶと減少した。

(2) 賞罰の効果 Schafer and Murphy (1943) は A 図形と B 図形の対から成る図地反転図形の提示に先立ち、A B の各図形に賞罰(金銭のやりとり)を連合させた上で、同反転図形を瞬間提示し、賞に連合づけられた方の図形の知覚がおこりやすいことを示した。

Proshansky and Murphy では半暗室における線分の長さ判断実験に先立ち、長い線分群には賞を、短い線分群には罰を連合つけた上で、中位の長さの線分を示したとき、被験者はこれを長い線分群に分類する傾向をみせた。このとき被験者の行動は“learning what to say”ではなくて、事実、線分は長く見えるのだという。同様な結果は重さの判断についても得られた。

Smith, Parker and Robinson (1950) はドット群のドット数をあてさせる実験で、正答の場合のみドット1個につき1点を与えるという手続きをとった。このように正答への動機づけがなされたにもかかわらず、ドット数の過大評価傾向があった。

Rigby and Rigby (1952) はサイコロをふったときの目の、ある文字に対して正の強化(お菓子)、ある文字はニュートラル、ある文字には負の強化を与えたが、正強化文字の強化回数が多い程、認知時間の短いことを認めた。

(3) 対象の価値の効果 Postman, Bruner and McGinnies (1948) は Allport-Vernon 価値診断テストにより、いわゆる理論、経済、審美、社会、政治、宗教の6類型に被験者を分類し、各々の価値に関連する語の最小認知時間をしらべたが、被験者の価値領域に対応した語の認知時間は短かかった。

Bruner and Goodman (1947) は児童にコイン・サイズを比較刺激とマッチさせる実験で、コイン・サイズの過大評価を認めた。(統制条件としてコインと同型同大のニュートラル・カード版を使用。)貧困家庭の子どもにこの効果が大きかった。

Ashley, Harper and Runyon (1951) は貧富の催眠暗示を与えて Bruner-Goodman 型の実験を追試し、同様の結果を得た。また金属片に対する材質暗示条件では、鉛、銀、白金の順で、より大きい過大評価がみられた。

Lambert, Solomon and Watson (1949) はコインの代りにポーカークリップを使用し、所定の作業の報酬としてこれを与えるとともに、スロット・マシンを通してこれにお菓子購買価値を与えた上で

Bruner-Goodman 型実験を行った。

Bruner and Postman (1948) は記号象徴価値を問題とし、ドル \$ やハーケンクロイツ (ナチのシンボル) の印字されたディスクについて Bruner-Goodman 型実験を行った。ドルの方がクロイツよりも過大視されたが、クロイツもニュートラルよりは過大視された。

Beams and Thompson (1952) は子どもの好きな食物と嫌いな食物のスライド投影像を調節して、その食物のサイズを記憶的に再生させた。好きな食物の大きさは過大再生された。これは記憶イメージ再生であることがポイントであるが、Carter and Schooler もコインの記憶再生においてのみ Bruner-Goodman 効果を認めている。

(4) 人格要因について 人格の投影法診断テストは指向状態説を裏書きするものに他ならないが、仮説検証の正確さに欠ける。インクプロットに対する運動反応と向性、身体運動に伴う運動錯視と人格要因、フィールド・ディペンデンスと隠し絵さがし、絵画系列分類や順応水準移動のフレキシビリティと人格的フレキシビリティ等々の関係がいわれる。

いくらか組織的なものとして Cattell and Wenig (1952) の因子分析的研究がある。彼らは絵画統覚検査におけるような投影を知覚変数としてとりあげ、これをミスパーセプション misperception といって、その8因子を抽出した。すなわち①自己主張性、②性的欲求、③認知的欠陥、④自閉性、⑤合理化、⑥幻想、⑦“真”の投影、⑧一般神経症である。Cattell and Wenig はこれらの項目を性格特性というよりはミスパーセプションの要素とみなしているが、ここにはあきらかに人格変数もあり、全体としてそれぞれの人格パターンを表すものである。たとえば性的欲求、不安、自己主張は幻想と関連し、合理化は超自我やパラノイアの投射である。

(5) 言語刺激の知覚 情動的な動揺や脅威をきたす語の認知必要時間は長い。あるいはミスパーセプションや意味のとりちがえがおこる。認知以前に特有の情動反応がある。この問題は指向状態説のうちでも最もチャレンジングな問題とされてきた。McGinnies (1949) によれば、不快語やタブー語に対して被験者はそれが何たるかを認知する前に GSR (Galvanic Skin Reflex), すなわち皮膚電気反射を示し、認知必要時間も長かった。とりちがえなども中性語は構造的に類似しているが、問題語は構造的にも別のものになった。

McCleary and Lazarus は無意味つづりに電撃を連合させて情動条件づけをした刺激語について

McGinnies 効果をしらべた。電撃と連合した無意味つづりには認知前 GSR があった。このいわゆる識下知覚は刺激—知覚—認知—反応の伝統的図式をくつがえすものである。過去経験に由来する語の意味は深い生理学的過程であり、意識的知覚は単なる表層的顕現にすぎない。しかしここには後述のように個体の内においてつねに入力語を監視し、ときに応じて事前に警告を発するところの内的知覚者という擬人的モデルの登場する執ような所以がある。

実験の所見の解釈と知覚防衛説

以上のような諸実験から動因と知覚を媒介する何らかのメカニズムないし概念がいくつか仮定される。たとえば Murphy は欲求満足に指向づけられた願望的知覚としてこれを自閉性 autism と呼んだ。Bruner and Postman は動因性の知覚仮説の結果と解釈した。知覚がもし仮説どおりであればその方向に強化される。それによって高い選択度を得た知覚対象はより明確に強調 accentuation してみえる。また Postman, Bruner and McGinnies は価値指向に応じて現実の対象を受容しようとする選択性感増 selective sensitization, これを拒否しようとする知覚防衛 perceptual defense, 自己と同じ価値領域に知覚を同化しようとする価値共鳴 value resonance の三つのメカニズムを提唱した。知覚防衛については、被験者にとって反価値的 contravalant な刺激語は認知がおそいだけでなく、反価値的な前認知的反応がおこることがこれを示している。一方、共価値的 covalant な刺激語は認知がはやいと同時に、共価値的な前認知的反応をおこす。この他にもなおいくつかの説明概念が生まれた。利用可能性 availability, 同化 assimilation, 正規化 normalization, 支配性 dominance, 妥協形成 compromise formation, ビジランス vigilance, 図式化 schematization, 個性関連度 degree of personal relevance 等々。

Klein, Schlesinger and Meister (1951) は知覚の増感または防衛を欲求や価値よりも一層人格的な関数、つまり value よりも valuer の関数であるとした。知覚の規定要因は欲求などの包括的カテゴリーではなく、それをいかに処理するかという主体のやり方に関係がある。そこでさらにつぎのような説明概念が加った。すなわち自我の構造 ego structure, 誤差耐性限度 limits of tolerance of error, 知覚的態度の好悪 preferred perceptual attitude など。

以上の諸概念のなかで最も有名であり、最も問題をふくんでいるのが知覚防衛であった。精神分析的概念である抑圧、願望充足、合理化などがわれわれの感じ方や考え方、あるいは信念の背後にあるとい

うのは普通のことである。しかしこの種の機能的思想を知覚に適用するというのは、これは一つの新しい考えである。それにもかかわらず反価値的の刺激語に対する認知性の低下や前認知的情動反応に代表される実験的所見は、やはり知覚に対する精神分析的抑圧にも似た無意識的機制があるのではないかということ強く暗示するものであった。

McGinnies はこれについて、不快な刺激語の条件回避を想定した。その語の求心性インパルスが完全な認知に達する前に、何らかの手がかりが適切に評価され、それにもとづいて自律神経系の中核である視床過程が中枢的認知を遅滞させるのである。そのようにして不安が回避される。しかし知覚防衛説の問題点はそのような行動生理学的説明に訴えれば回避できるというものではないのである。

知覚防衛説の問題点は、これを目的論的な機能主義として考えなければ、防衛という概念の使われた理由が理解できないというところにある。しかしこれは全くナンセンスな結果を生む。もし防衛者として個人の内側において知覚活動をコントロールする何物かがあるとすれば、これは擬人的マネキン理論に陥ってしまう。かといって、もしも防衛が知覚過程それ自体によってなされるならば、一つの生理的過程が動作しないように動作しているという奇妙なことになる。

実際、知覚防衛説における“perceiving something before one perceives it”という矛盾はすぐに指摘された。ここには知覚者の内部に前知覚者 preperceiver が想定されている。Hochberg and Gleitman はこの前知覚者を純粹自我 pure ego と称し、“欲求論者はこの小さな simulacrum の手にすべてをゆだねることによってしか、欲求軍団の統一ができないのか”と批判した。個体のミニチュア、simulacrum、別称 homunculus 仮定は問題の解決をエンドレスにしてしまう。Postman and Bruner 自身もこれをももちろん承知していた。素朴な眼で見れば(彼らのいい方によると)“超自我のイメージがユダの眼を通してのぞいている。そして侵入者を入れるべきか入れざるべきか、監視している”ということにもなる。知覚防衛の考え方にひそむこのようなデモノロジー demonology をさけるため、彼らは記憶トレースや反応系における利用可能性 availability の差異ということをいった。

そもそも対象認知はつねに過去の記憶のトレースを賦活する。認知は刺激と記憶との何らかのコミュニケーションを必要とする。このことは語の認知度の変化やミスパーセプションを説明するのに重要であろう。このような記憶の賦活ないしは動員 mobili-

zation に際して、記憶トレースはそれぞれ利用可能性が異っている。あるものは使用しなかったために消滅しており、あるものはその賦活が罰をうけたために利用可能性が低下している。あるものは高度にアヴェイラブルであろうし、しかも広範囲に刺激般化を示すこともあろう。そう考えれば veridical な報告だけが刺激(語)に対する心理学的に妥当な反応とは限らない。それは多くの可能な反応の一つにすぎない。反応の中には情動性のものもあり、回避反応を生ずるであろう。タブー語による情動反応は知覚的完結(認知)を先回りしてこれを妨げ、脈絡のない反応や対価値的の反応をひきおこす。そうすればスーパーエゴもユダの眼も必要ないというのが彼らの考えである。

指向状態知覚実験の問題点

指向状態説は知覚防衛のような疑問概念を生んだが、すでに述べたその代表的な実験にも問題点が少なくない。空腹と食物知覚との関係をみた Levine, Chein and Murphy をみても、このとき被験者は何を“見た”かではなくて、“連想”を言語化するように教示をうけている。知覚と連想イメージと解釈との間に明確な線はひけないにしても、知覚についての主張であるならもっと“what they saw”に話を限定すべきであろう。ロールシャッハ図形に対しては何ら有意な空腹の効果はないといわれる(Brozek, Guetzkow and Baldwin, 1950~51)。

(1) 刺激語の日常使用度数の問題 価値観と語の認知に関する Postman, Bruner and McGinnies の実験について Howes and Solomon (1951) は語の認知時間は語の使用度数ないしはそれによる語の親密度と関係があるといった。Thorndike-Lorge 語使用度数表の両端の語の認知時間の差にくらべれば、価値の両端の語の時間差は小さなものである。使用度の低い語はなるほど価値観と認知時間との関係がみられるが、高度数語はその関係ははっきりしない。したがって認知時間は単に語の反応確率を反映するだけではないか。

Postman and Schneider (1951) はこのことを検討した結果、たしかに高度数語は価値のちがいを示さないが、低度数語はその長い認知時間のあいだに価値領域の選択的感度が作用してその効果の出る余地があるといった。しかし Solomon and Howes によれば低度数語といえども認知時間はやはり使用度の関数である。一般的には低度数語であっても、ある個人にとって価値の高い語はその個人にとっては多く使用されるであろう。このような使用度数による説明ならば周知の原理であり、未知のメカニズム

を入れないですむ、ところで Postman and Schneider はなおも個人の価値観に固執した。認知時間を規定するのがたとえ高使用度数であるにしても、その高使用度の背景にはやはり個人の価値観がある。価値があるから過去においてもよく眼に入った。だがこの議論はもはや指向状態説とはいえない。指向状態説は価値が知覚行為に直接作用すると仮定するのが本旨で、過去経験や過去の活動あるいは習慣を媒介とするのではないはずである。語の価値が知覚に“直接”影響するという仮説の事実検証が失敗なら、その説明も根拠を失う。知覚増感、知覚防衛や知覚共鳴もこの限りにおいて出る幕はない。

(2) 量的次元における測定手づきの問題 Bruner and Goodman のコイン・サイズの測定に関するその後の追試は必ずしもこれを支持してはいない。ただコイン・サイズの記憶イメージについては拡大視があった。Gilchrist and Nesberg (1952) は食物や飲物の写真のスライドを一定照度で投射して見せた後、空腹または渇の被験者に再びそのスライドを投射して、その照度を前と同じに調節せしめたところ、欲求関連イメージの照度は高くマッチされる傾向があった。これも記憶イメージの測定ということになる。欲求や情動が記憶過程に量的次元においても影響するということはあってもよい。しかし問題は現実の知覚における量的次元に対する直接の効果の有無でなくてはならない。指向状態説は刺激を臨界状況におくことを許しはするが、刺激を消してしまうことは許さないのである。

同様な疑問は Bruner and Goodman 自体をはじめ、Lambert, Ashley らの Bruner-Goodman 型実験に多少ともある。はたしてそれがどこまで現実の量的知覚の測定であるのか。比較刺激どうしが同時に観察されているか否か。マッチング操作の中に記憶過程や身体的構えが媒体となっていないかどうか。その実験事態における知覚がどこまで stimulus bound であるかについてはいずれをとっても必ずしも確としていない。

(3) 人格要因の問題 ロールジャッパ・テストにも見るように知覚の測定や分類による人格研究ないし臨床診断は知覚論と独立に成果をあげてきた。これらの投影法テストに精神異常者は抑制を示し、あるいは葛藤場面における抵抗、衝動場面では増感がある。健康人でも適応的範囲においてその人格特性や気質に応じた、ときに non-veridical な知覚を示す。しかし指向状態説の実験的検証としては満足なものではない。それはつぎのような理由による。

指向状態説は知覚のもっぱら量的次元に対する行動動因性効果について一般法則を要請するのに対

し、人格研究や臨床では個人診断が目的である。したがって一般的知覚理論のための一義的データは期待できない。また臨床診断における知覚記述は知覚理論が必要とする形式の正確さと規定性に欠けている。たとえばロールジャッパ反応は狭義の事象的対象知覚であるのか、連想、心像あるいは解釈であるのか、あいまいである。ここでは量の測定的観念はとぼしく、意味分類や定性的解釈が主である。絵画統覚検査も同様である。仮りに知覚イコール解釈であるにしても、その解釈的物語の何が veridical であり、何が nonveridical であるのかということがない。このような定性的題材の中に指向状態説が要請するようないかなる検証次元があるであろうか。

知覚の人格理論は実験的には操作や統制のむずかしい個人の背景的条件や持続的構えとむしろ関係がある。人格・臨床研究における知覚は指向状態説とあきらかに関連するもの、こうした理由で決定的な役割をもち得ない。

(4) 識下知覚と知覚防衛の問題 タブー語の認知時間に関する McGinnies の実験に対しては Howes and Solmon の二つの批判があった。一つは先に述べた刺激語の使用度数の統制の問題である。もう一つはタブー語の知覚おくれは知覚でなくて応答のためらいであろうということである。そのような実験場面に謹厳な顔をしたプロフェッサーばかりか、妙令の女性アシスタントでもいようなものならなおさらである。これはコントロールすべき重要な社会心理学的要因にちがいない。タブー語に対する GSR の増大も前認知的ミスパーセプションも同様に社会的心理的要因で説明できる。McCleary and Lazarus が無意味つづりを使用して行った実験はこの二つの批判にこたえる形になっているが、その結果は電撃と連合したシラブルの方が中性的シラブルよりも認知が促進されるという、知覚防衛とはおよそ反対であった。ただ自律反応系による識下知覚は検証された。

語の使用度数条件をめぐって議論があったが、Cowen and Beier (1952) は Lorge 語使用度数によってこれをコントロールして語認知実験を行った。刺激語はぼかしによって臨界条件をつくった。いずれにせよその結果、使用度数は認知性と関係なかったが、タブー語はその解説がおくれた。したがって知覚防衛があるとされた。この実験では実験者と被験者を、異性どうしあるいは同性どうしの組合わせとし、また実験者が刺激語を前もって一通り読みあげるなどして、社会心理的抵抗要因を排除しようとした。しかしそれで問題は解決されたであろうか。Cowen らは社会的要因をまだ簡単に考えすぎてい

るように思われる。

この礼節ある社会では人は誰でも良俗に反する語を心にいだいたということを人に知られたくないものである。実験後の内省報告で意識的抑制はなかったとか、被験者は実験慣れしているとかいうのは、抑制がなかったことの証拠にはならない。日常接する人たちの前で、実験室の中でだけ被験者が別人になってしまうとか、ロボットになってしまうとかはできない相談である。これを完全にやるには被験者一人で実験を操作して、他人にわからぬように自己の知覚を忠実に記録するというやり方を信用しなくてはならない。それでも不十分かもしれない。ペニスとかなんとかいう語は、それを見るからではなくて、他人がいるから被験者を脅かすのである。

誰もいない所で仮りにそのような言葉が書かれた紙片が落ちていたら、人はそれを見るのを恐れるどころか、むしろ目ざとく興味を示すであろう。要するにここでいう防衛とは、知覚というよりは人間関係の問題である。すくなくともそれは社会的条件における知覚である。脅威なのは対象自体ではなくて、その対象の（他人の中における）われわれの認知の仕方である。これもまた知覚抑制であるならば、これを知覚防衛といえなくもないが、それはまた新しい問題である。つよい攻撃傾向を抑圧している臨床例では、関連刺激の知覚も抑圧されるという。結局、われわれ自身に対する抑圧拘束の理由の少くとも一つは社会的であり、他者に対して攻撃傾向がわずかでもしっぼを出すようなかなる知覚をもあからさまにすることを警戒するのである。つぎのようにいうこともできる。すなわち実験者は抑圧された被験者にとつて超自我あるいは社会的自己の投射である。この場合、被験者の“一部”が、語を認知した“もう一つの一部”（および実験者）に対して、それを認容することを拒むのである。

(5) “もう一つの内側-外側問題” さて問題を別の見方からみれば、ここにはいわゆるinside-outside problem がまた別の形で存在する。そもそも個体の心理学は動的構造をもった内的機能の側面と外的社会に向って構造化された側面とをもっている。このような二つの側面は一個の弾丸にもある。弾は一個の質点としての重力の時空構造にしたがって軌道を飛ぶ。同時にその内部には分子の原子の構造と変化がある。この内外構造は理論的に統合されねばならないが、現在の力学はそれについてまだ何も示さない。個体の行動についても同様である。個体はそれ自体の内部構造をもちながら、外的にはより大きな集団構造の中の一要素である。このような構造を表現しようとする Lewin のトポロ

ジーでは残念ながら内部構造が表されていない。あるいは内部要素と外部構造が混然としている。これは Lewin のトポロジーにかぎらず、一般に社会心理学の理論的プログラムにとっての基本問題である。

この観点で語認知の問題を見ると、タブー語の認知のおくれについてはつぎのような設問となる。それは知覚構造（内部構造）が集団構造（外部構造）に対して、相反する知覚的意味を有するために、その外的表出が抑制されるのかということ。他方、外的集団構造の個体規制力が強くて、そのために彼をして反社会的語の表出をためらわしめる、さらにはその内部構造がその知覚をすら不可能ならしめるのかということである。外的集団構造とその個体規制力は強いが、内的知覚構造もまた強い。実際、それによる外界の veridical な知覚なしには個体は生存できない。

指向状態説の実験的理論的評価

指向状態実験は条件統制や解釈にいくつかの疑問点があることは以上のとおりである。これを簡単にまとめるとつぎのようになる。

(a) 身体的欲求（食欲）と食物連想反応 知覚か連想かという点に問題がある。Murphy らの実験は空腹時間の関数として単純でないところがあり、ad hoc な仮説が必要になっている。

(b) 賞罰の効果 すくなくとも賞の効果については凶地知覚と刺激の量次元判断に肯定的結果が多く、問題点は少ない。

(c) 価値感と刺激語の認知 語の使用度数と価値要因が混乱している。標準的使用度数をとっても個人の特性を反映しない。

(d) 対象の価値と量次元知覚 Bruner and Postman は反価値的対象にも拡大知覚を得ており、問題をむずかしくしている。またこの量知覚変化が対象の意味要因によるのではなくて、たしかに動因の効果であることの確証がない。記憶過程が介在するケースもある。

(e) 知覚防衛 実験結果における若干の矛盾より、その機能主義的解釈に重大な問題がある。また社会的要因を無視できず、知覚抑制というよりは社会的場面における反応回避である可能性が大きい。

(f) 識下知覚 自律神経系による認知前反応は重要な意味をもつ現象と考えられるが、知覚防衛とは必ずしも並行しない。つまり McCleary and Razarus は電撃連合シラブルが中性シラブルよりはやく認知されるとしている。

(g) 人格要因 指向状態説と密接な関係のある所見が多いが、知覚研究としての直接性がうすい。

ここでとくに二つの実験についてコメントを加える必要がある。一つは Rigby and Rigby の賞と連合した文字の認知必要時間がより短いということ、もう一つは Proshansky and Murphy の、線分の長さの分類で賞と連合したカテゴリーの方に判断が偏るということである。これらはいずれも賞という強化によって一つの構えができたためと解され、価値や動因のようなより動的な概念によるまでもないと思われる。長さ判断のような場合には、あらたな順応水準の形成と考えてもよい。ただその構えの形成に動因が間接的に作用したことを否定はしない。構えは選択的であり、特定の刺激パターンを受容する下地である。そのような下地がないとき、刺激パターンの処理がおくれ、認知時間が長くなる。

賞罰の効果について社会心理学は別の考え方を示すかもしれない。実験場面で実験者がそれぞれの刺激について、重要であるとかないとか暗黙のうちに考えていると、被験者の構えの仕方がちがってくる。どれが重要かは賞罰の与え方で被験者にコミュニケーションされるのである。賞を与えてあたかも“これはとくに注意すべき刺激である”と教えているようなものである。賞と連合した刺激に価値を付与するというほどのことではなく、単にその刺激に構えをとることを実験者が望んでいることを被験者が感じるだけでよい。ここでは個体が外的集団構造の影響を受けている。その社会構造において、実験者の期待に応えることが被験者にとって強化になっている。この学習過程は how to perceive であるのか how to communicate であるのかかわからない。構えは無意識的であるから、被験者の内省報告も信用できない。知覚の回避ないし防衛がもしあるとすれば、それも反対構え contrary set で説明できよう。しかし罰に対する知覚変化は賞によるほど一義的ではない。知覚防衛は単に刺激のある手がかりに条件づけられた知覚回避反応と考えてはどうであろうか。前認知段階では完全な刺激パターンはないが、少くも一部分がそのような手がかりにはなり得る。

以上は動因性とは間接的にしか関係のない概念である注意や構えによる試論である。こういう概念ですむなら指向状態説は要らなくなる。指向状態知覚実験は動因性要素が知覚決定要因として直接知覚を左右するということの証明に失敗した。動因が知覚的行動に影響はするかもしれないが、真に知覚的なものか、中間的（たとえば社会的）な条件の動因的側面なのか決め手が無い。結果は一義性に欠け、いまだ法則的記述には至らない。

しかし指向状態説にはもともと非論理的なこととか、あり得ない仮定というものはなかった。動因エ

ネルギーが行動の時間空間的特性に何らかの法則性をもって作用すると考えるのは正当な推理である。心理学理論は行動のあらゆる要因の統合であるべきなのであるから、知覚が veridical であるとともに、なお動因性効果を予想するのは妥当であり、そうあるべきだともいえる。したがって問題は知覚における動因効果の有無でなく、そのあり方、構造固有性との関係、あるいはその nonveridicality の本質などにある。その追究の過程では理論も仮説も変ることであろう。

結論の前に知覚理論の多様性、不確定性、対立性などについて思いをいたす必要がある（文献参照）。指向状態説はたしかにたいした意気込みではあったけれども、決して独断的でも、過度に多血質でもなかった。それは魅力的な研究分野を開いたものではあるが、統一的一般理論の鍵になるなどは考えていない。心理学理論は複雑多岐であり、指向状態説が知覚現象の一部に関わるにすぎないことも承知している。他の行動理論との関連も必要である。

実験は当初の仮説の検証に成功しなかったが、理論的重要性は失われていない。実験はときに相反したり意味不明だったりするが、なかには信頼に足るものもあり、あるいは新しい問題を提起した。知覚防衛には概念上の疑問があるが、識下知覚には認めうる何かがありそうである。大きさ、明るさなどの量的次元の過大評価も意味不明ながら有意義な発見といってよい。臨床心理学における知覚テストは目的が異なるけれども行動理論の総合的見地からは見通しを拓げるものである。これらの所見を通して、情動、動因、欲求、価値、葛藤など、人間行動のエネルギー論的テーマが一貫している。そういうエネルギーと知覚との関係が何らかの形で現れている。これを概念的に体系化することが心理学理論にとって統一的正当的な基礎となるわけである。そのような現象を再認識させたところに指向状態説の大きな貢献をみることができる。

付説1 知覚の量次元上の測定実験における方法論的問題

対象の知覚の大きさは純粋に現象的であり、その測定は物指をあてるようには直接に接触 encounter できない。実験的には、刺激条件、言語反応あるいは装置を使用して操作的に定義測定される。コインのような円形の心理的大きさはダイヤフラムの大きさとの視的マッチングにより測定される。操作主義的に極論すれば、知覚は言語反応ないしは手動的反応だ、ということになる。個人の内的体験について言及することはできない。もし望むならば、知覚と

は刺激とマッチング反応との間の観察不可能な媒介変数である、という文句を加えてもよいが、それ以上はいえない。それでも敢えて知覚的大きさの体験自体を問うならば、一つの決定的な問題に遭遇する。

被験者が対象の知覚的大きさにダイヤフラムをマッチさせたとき、彼は本当にサイズだけに反応したのであろうか。この問題は心理物理的実験では刺激の単調な無意味性によって統制している。しかし指向状態実験ではまさにこの統制を加えないことが実験の不可分の特徴である。対象は中性的であってはならない。それどころか被験者にとって挑戦的意味がなくてはならないのである。そこで問題は被験者がその大きさを知覚した通りに確実に装置の上に再現すべく whole-souled effort をしているか、あるいは対象についての態度、感情、観念にあわせるような操作が介入してはいないか、ということである。このことはマッチングが記憶の上で行われるとき一層問題となる。しかしこの要因は二つの刺激が同時に観察される条件でなければ避けられない。それは極めて難しいことである。いずれにしてもこのような内容は外的操作や量的結果には現れないものである。言うことは、被験者にとって価値的事物または欲求事物と想われるものとのマッチングでは、中性的対象におけるよりも被験者は大きなダイヤフラムをつくるということだけである。

以上の議論は現象的データの限界を示すものである。直接体験の言語報告では客観的正確度の規準にあわない。マッチング操作は客観的に見えるけれども、まだ観察者関与がある。科学的客観性の基礎としての外的操作はあっても、測定すべき概念の対象を denote し、identify し、guarantee するものではない。知覚実験にはどうしてもこのような本質的限界がある。

このことは巨視的方法（刺激一反応を両端とする媒介変数概念で問題を解決しようとする方法）の限界を示すものである。個体が“一つの全体”としてダイヤフラムを操作することでは、彼の知覚的、観念的、記憶的過程について何事も物語れない。外部反応は単に一つの集合体事象 aggregate-phenomenon の外部要素を示すのみであり、個体内部の集合体 aggregate の探究は別に方法を求めなければならない。量次元上の過大知覚が確立されたとしても、量次元の denotable な基礎がなければ理論としての説明性がないのである。量次元知覚に対する動因の効果が、解釈や意味の生理学的付随事象によるものであるにしても、現在の外的操作の方法論的限界のもとでは、全体的集合体を“判断”の部分と“知覚”の部分とにわけて境界線をひくことはできない。

付説2 目的価値と方法価値：動因と認知

価値や動因について指向状態説のすくなくとも一部は、いささか大げさな雰囲気につつまれている。動因が強調されすぎる嫌いがある。なるほど空腹や電撃は切実な状態ではあるが、図地反転や線分の長さの実験に10セントや20セントのやりとりが、大学生の被験者にとってなにほどの賞罰になるであろうか。タブー語やハーケンクロイツにしても、なるほどタブー語は言いにくいだろうが、それに対して被験者が自分の知覚をおさえなければならぬほど防衛する必要のある脅威とでもいうのであろうか。被験者が刺激語を読みとろうと真剣に努力しているにもかかわらず、たかだか刺激語の意味や価値といったことのために認知できたりできなかつたりするのは、なんと高価な代償をはらっていることであろうか。このように考えると、たとえば貧困の催眠暗示をうけた大学生の小額コインに対する反応が、まさにその実質のない心理的欲求によってきまるとか、貧困な子どもがコインに対する否応のない欲求感をもって反応し、そのゆえに金持ちの子どもと知覚サイズに差が生ずるとか、あるいは知覚が社会・文化的価値の影響をうけるとかという言い方には、いずれも同感できない。

これはそのように意味深げに考えず、もっと単純に意味のちがいが differential meaning によって解釈したらどうであろうか。その場合、知覚でも記憶でもよい。態度への効果でも真の知覚の効果でもかまわない。事物の意味が一定の照合基準 frame of reference をつくる。それがコインであるとかお菓子であるとかいうことが、評価系列を新たな水準に移動させるのである。この意味における価値は個人の欲求や興味を代表するものでもなく、社会的理由でも文化的連想でもない。単にひとつの意味のインディケータとして作用するのである。

そもそも指向状態説には価値に二つの区別があることがあきらかでない。デリケートではあるが価値には目的価値 end value と方法価値 means value とがある。目的価値の目的とは、現実の欲求をとともかく現実に満足することである。したがってその欲求をみたしてくれる事や物がそういう価値を有するにはちがいないが、目的価値の程度はそれが欲求を満足する程度というよりは、満足されるべき欲求の程度によると考える。すなわち個体の欲求強度の関数である。空腹が長ければ食物は大きな目的価値をもつ。満腹になると同じ食物でも目的価値はなくなる。動因の概念はあきらかに目的価値と関係がある。すなわち動因は目的価値を有する対象へ個体を現実

の行動として向わしめる力である。したがって動因と目的価値はその問題場面における個体の関与の程度を表わしている。コイン・サイズの実験場面におけるコインはすくなくとも貧困の子どもには強い目的価値がある。その子どもは現実にお金欲しい。金持ちの子どもは10セントのコイン1個をもらったところでありがたくもない。

方法価値はある事や物がやはり欲求をみたしてくれるから、これに付与される価値であるが、ここでは現実には欲求の有無は問わない。欲求をはなれたところで、一般的な価値として定義される。換言すれば、欲求が生じた場合はこれを解消する方法となる潜在的可能性の上で考えるのである。方法価値の程度は、欲求を一往コンスタントとしてその欲求を満足させる程度で表すことができる。すなわちそれは対象の関数である。

ある人にとって仮りに現在お金の目的価値がないとしても、方法価値はあり得る。お金の価値は一つの標準的なスケールの上でこれを評価することができる。そのような場合のコイン・サイズ実験では被験者の場面関与は一往ない。そして仮りにコイン・サイズの知覚にお金の効果があったとしても、その要因は動因というよりも対象の方法価値の表現というべきである。方法価値は動因や欲求よりは認知的構えを反映している。そのような方法価値をふくむ意味集合体は、おそらくコインの記憶的サイズなどの知覚的次元により強く影響するであろう。このように価値を区別することによって、動因とか危機、欲求などの概念にそれほどよく依存することのない別の考えができるのである。それは認知的意味が判断の照合基準を偏らせるという、もっとおだやかな仮説である。もちろん動因要素を排除するものではない。なるほどまさにはじめにそれが実験課題であったように、被験者のつよい場面関与をふくむ目的価値も一層の知覚効果を示すであろう。しかし知覚に対する目的価値の効果についてと方法価値の効果についてとは別の実験的統制が必要である。

以上のような理由で方法価値に動因概念を適用するのは適当でない。少くともその関係は間接的である。方法価値はもっと認知的であり、場面への直接関与からある程度はなれたところで明確な関連意識として知覚に入ってくる。もちろん実際のあるいは実験の場面では動因性価値と認知的価値の両方が入っている。そして指向状態理論はこの区別をしていないように思われる。したがって知覚の強調拡大効果があっても、それが主張するように本当に動因的な効果かどうかわからない。コイン・サイズの実験でいえば、お金一般に対して仮りに同じ目的価値

を有する被験者を使用できたとして、コインの額面金額の大小で知覚変化が測定されなければ、この点の条件統制がなされていることにならない。目的価値が一定で方法価値が変数である。貧困少年からコインの目的価値をルール・アウトすることは難しいが、同じ額面金額でも貧困少年には方法価値もより高いであろうからより、大きい過大視となることもあり得る。

Beam and Thompson と Gilchrist and Nesberg は食物のプロジェクト・イメージのサイズと照度の評価実験であったが、ここでは評価対象の方法価値は一往標準的と考えられる。しかも実物のレプリカであり、シンボリックである。ここに得られた過大評価は目的価値の効果と考えられる。ここにも方法価値が入っていないとはいえないが、それは動因に対して等価である。ただそれが分離できないところに方法上の限界がある。

二つの価値があるにしても、それが知覚の量次元に効果をもつ点では機能的には同じ要因ではないかともいえよう。しかし、空腹度の異なる被験者が食物の大きさを評価するのと、同じ経済的欲求状態の人が異なる金額のコインの大きさを評価するのとは、たしかに重要なちがいがあがる。前者は動因的であり後者は認知的である。指向状態説はもともとは前者を意味していたはずである。二つの過程の結果が同じだという理由でその本質のちがいを不問に付するという機能主義は著しく研究を限定するものである。方法価値と目的価値のちがいはたしかにデリケートで注意深い論理を必要とするとともに、被験者が必ずしもそれに意識的ではない。さればといって巨視的存在としての被験者は知覚判断にあたってそのような区別はしていないと考えるならば、個体全体とその部分との間にふたたび擬人的混乱を招くことになる。つまりそれでは誰かがその区別をしている。しかし意味理解や判断がそのような誰かを必要とするような熟慮過程でなければならないと考えることはない。もっとデリケートな計算がもっとすばやく無意識におこなわれるものである。

二つの価値変数を区別しないというのは、指向状態説の独立変数としての動因の概念に由来する。ここでは動因を個体にドライブをかけるだけでなく、問題解決に向って個体を舵とり steer する過程と考えている。人間の行動の背後にあって行動の動力となるだけでなく、行動の軌跡からよみとられる何ものが動因である。その意味では知覚もまた動因によって方向づけられるのである。すなわち motivation represents a directive state であると考えている。

しかし動因をこのように考えたのでは目的価値と方法価値の区別ができない。行動の基本的構造が失なわれてしまう。動因を分析不能な包含的なものとすれば、関連のすべての問題に通用する独立変数らしくみせることもできよう。しかしそのように行動エネルギーと方法価値ないし認知行為とをひっくり返してしまつたのでは、またまた擬人的存在を仮定することにならないであろうか。個体は内外の変化からエネルギーを得て刺激されるとともに、その行動のルートを選択する。対象をあるときは受容しあるときは拒否する。この二つの側面を担うところの動因があるというのならば、われわれは動因と個体とを同一視することになり、一種のタウトロジーにおちいるだろう。あるいは個体の中にその個体の小さなコピーを読みこんでいることにもなる。これはつまりマスキング・モデルである。

マシンとそれを走らせるモーターとが別ものであるように、駆動することと方略評価とはちがう。モーターはスピードをきめる要因ではあるが、マシンを操縦 steer するとはいわない。しかしマシンの操縦はスピードのコントロールもふくむ。同様に基本的欲求状態は量次元知覚に影響するのであると同時に、方法価値構造もまた量次元知覚の決定要因となるかもしれない。方法関連性の判断を欲求状態に付与させる必要はないし、また両者を包含する高次の機能(指向的動因)を仮定する必要もない。ここには何らかの動的法則性で連結する知覚集合体の二つの構造ないし下部構造があるということである。媒介変数論理はこれを外的観察事象と結びつけて実験をすることはできるであろうが、その実験の意味する構造を真に示すことはできないであろう。

かくして何らかの新しい研究方法が求められねばならないと考えられる。欲求満足体は目的価値と方法価値を有し、しかも現状の技法ではその分析が極めて困難である。量次元拡大効果が真に知覚現象であるのか、または記憶ないしは態度の効果であるのか、いずれでもよいが、ここには目的価値と方法価値の基本的な心理機制がはたらいている。この理論の解明にとってはもはや巨視的方法是放棄されねばならない。代って細部にいたる“denotation”をふく

む概念を使用せねばならない。

要 約

F. H. Allport の *Theories of perception and the concept of structure* (1955) から指向状態説 *directive states theory* についての彼の論評を抄録した。指向状態説はいわゆるニューロク心理学として1950年代に騒がれたものであり、その意味ではいささか旧聞に属するが、現今の認知心理学におけるトップ・ダウン型処理モデルとの対応においても、その現代的意義は失われぬ。Allport は指向状態説における知覚防衛についてこれを擬人的と批判し、むしろ社会心理学的要因の可能性を重視した。また価値における目的価値と方法価値を区別し、前者は指向状態説でいう動因であるが、後者は認知的であるとした。Allport は機能主義的媒介変数論理に反対であり、知覚集合体 *perceptual aggregates* の指示的概念 *denotive concept* の必要性を力説した。

文 献

- Allport, F. H. 1955 *Theories of perception and the concept of structure*. New York: Wiley.
- 金子隆芳 1970 Allport の知覚諸学説批判とその構造学説 東京教育大学教育学部紀要, 16, 63-69.
- 金子隆芳 1972 知覚論における形態主義——Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 18, 91-98.
- 金子隆芳 1974 知覚論における要素連合主義——Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 20, 61-66.
- 金子隆芳 1976 知覚論における機能主義——Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(続) 東京教育大学教育学部紀要, 22, 101-108.
- 金子隆芳 1979 知覚における運動的要素——Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(5) 筑波大学心理学研究, 1, 3-10.
- 金子隆芳 1980 知覚における意味の問題——Allport の知覚諸学説批判とその構造学説(6) 筑波大学心理学研究, 2, 1-11.

——1982. 9. 30 受稿——